

## 次なる段階へ 本校の臨地実習施設における病理部門での標準化シラバス

大堀晶子 檜山由香里 望月泰男 大西英文  
(昭和医療技術専門学校)

Key words : 臨地実習、標準化シラバス、病理検査部門

【目的】前回の本学会において、本校の全臨地実習施設のシラバス導入の5年間の軌跡について報告した。全施設のシラバス作成は、指導者並びに学生双方に価値ある変化をもたらし、施設間格差の是正に繋がっている。そこで、今回、本校での病理部門の標準的なシラバスを提示することを目的とし、卒前教育に必要な病理部門での臨地実習の在り方を模索したい。その過程で、検査技師養成機関の標準化シラバス作成の一指針となることを願う。

【対象及び方法】平成18年度における本校の全臨地実習施設32施設のシラバス内容及び平成18年度12月5日の臨地実習担当者連絡会議資料を対象とする。方法は、本校の臨地実習単位数12単位、5ヶ月間(約100日)を標準とし、病理部門の平均実習期間とシラバス実施率を算出する。次に、全施設のシラバス内容を分割し、到達目標(SBOs)での共通項目を整理する。その上で、学内教育と照らし合わせ、シラバス内容を精査し、標準的なSBOsを作成する。

【結果及び考察】全施設の病理部門においてSBOsの平均設定項目は11.6項目、平均実習期間は18.7日、シラバス平均実施率は99.7%であった。SBOsを大別すると、解剖見学に関する実習 パラフィン切片標本作製及び染色に関する技術実習 細胞診断に関する実習 迅速診断に関する実習 電子顕微鏡実習に関するもので施設間格差が少なく、共通す

る内容であった。その要因は、すでに全施設にシラバスを導入して、3年が経過し、年度ごとの実習書改正や実習会議等によって実習内容の均等化が進んだものと思われる。その内容は、学生実習の必要性を示唆しており、教育上重要と考える。しかし、すべてのシラバス内容が一致している訳ではなく、病理解剖への学生の関わり方、細胞診の実習内容、電子顕微鏡実習のあり方等において指導者側の考えが異なる。その上で、学内教育を鑑み、本校での標準化シラバスを示した(表1)。

【まとめ】病理検査部門での実習内容は、その期間を4週に設定している。そのため、指定規則に定める臨地実習(7単位、52.5日)の期間では、他の部門の実習を考えた場合、病理検査実習は2週程度となる。検査技師教育における臨地実習の標準化シラバスを作製するには、さらに実習内容が精査される必要があり、十分な議論が求められる。

表-1) 病理検査部門における標準化シラバス

病理検査室
一般目標(GIO) 病理解剖を見学し、その意義と人体の構造を理解する。又、病理検査の日常業務を体験し、臨床検査技師として第一歩を踏み出すための検体受付から切り出し、包埋、薄切、染色の標本作製の技術を習得する。
到達目標(SBOs) 病理解剖を見学し、その意義と臓器の位置関係を述べるができる。 固定からパラフィン包埋を実施することができる。 ミクローム、クリオスタットの正しい操作で薄切ができる。 染色(H.E、P.A.S、アルシアン青、マッソン…)操作を正しく実施し、評価することができる。 細胞診断の各検体(婦人科、呼吸器、泌尿器、体腔液)を的確に処理することができる。 細胞診標本からババニコロウ染色の操作を正しく実施することができる。 各検体の正常細胞と異常細胞を判読出来る。

連絡先 : [igi-rinken@showa.ac.jp](mailto:igi-rinken@showa.ac.jp)